

# 『ファシズムの想像力 ——歴史と記憶の比較文化論的研究』

小岸 昭 他編著 人文書院 1997 年刊

和 泉 雅 人

## 目次 (副題省略)

序文——小岸 昭

### I. 運動と制度

- 池田浩士「死者たちもともに行進する」
- 中塚次郎「農民におけるファシズム」
- 三宅昭良「恐るべき税制」
- 高田里恵子「高橋健二、闘う文化部長」
- 富山一郎「動員される身体」

### II. 言説の政治

- 鶴飼 哲「ドイツ占領期の記憶とフランスの〈戦後〉」
- 崎山政毅「アンデスのアヴァンギャルド」
- 亀山郁夫「独裁者との対話」
- 細見和之「アドルノのハイデガー批判におけるいくつかのモチーフについて」
- 松下たえ子「父の国の母の文学」
- 西 成彦「証言から妄想へ」

### III. 表象するファシズム

- 小岸 昭「ドイツ・ファシズムの演説」
- 平井 玄「非常事態下の音楽」
- 岩崎 稔「表象のポリティクスと映像の修正主義」
- 和田忠彦「ファシズムと笑い」

### IV. 性、神話、権力

- 伊藤公雄「『夫、父、兵士でない男は男ではない』」
- 伊田久美子「イタリア・ファシズムの女性政策」
- 深澤英隆「ゲルマン主義宗教運動の生成と挫折」
- 上野成利「ホルクハイマーと〈母性的なるもの〉のユートピア」
- 徳永 恂「フランクフルト学派と反ユダヤ主義」

あとがき (和田忠彦)

本書はファシズムの政治的・制度的アスペクトのみならず、表象文化の部分にも光をあてた本格的ファシズム研究である。論じられる対象も多岐にわたり、またテーマも多種多様である。ファシズム研究はこれまで個人研究者による各国別の研究が主流であったが、ファシズムそのものが広大なテーマ圏を形成していることから考えても、今後は本書のようなグローバルな視座に立った共同研究・比較研究の形式が増加すると思われる。その意

味でも、困難なファシズムの共同研究を本書のような先駆的な形で実現させた意義は決して過小に評価してはならないだろう。

全体は4部からなり、20本の論考がそれぞれのテーマに従って分類されている。扱われた国の内訳を見ると、ドイツ(10)、スペイン、アメリカ合衆国、日本(2)、ラテンアメリカ、ロシア、ポーランド、イタリア(3)という構成となっており、明らかにドイツ研究者が中心となっている。これは本書を生み出したファシズム文化研究会がもともとドイツ文化・思想の研究者集団から主に成っていたことから説明されるだろう。さらに4部に分けられた各部のタイトルは「運動と制度」「言説の政治」「表象するファシズム」「性、神話、権力」となっており、制度的なテーマから原理的なそれに至るまで概ねカヴァーしているといっている。

しかし各部に含まれる諸論考は、これらの上位テーマに密接に関連しているわけではなく、むしろそこに観察されるのはゆるやかな結合とでも呼ぶべきものである。各部の冒頭などに、そこに分類された諸論文を統合する視点が簡単な形でよいから述べられていれば、優れた論考を多数含んだ本書は一層その価値を増したことであろう。「個々の国の『ファシズム』をただ個別的に解析するのではなく、各国『ファシズム』の文化的・社会的な諸相の比較研究を通して『ファシズム』の全体像にできるだけ迫ろうというのが」本書の研究目標なのだが、それぞれかなり異なったテーマ/パースペクティブによって書かれた20本程度の論考を総花的に並べても「全体像」に迫ることは無論不可能であり、そのこと自体はおそらく執筆者たち自身にも痛烈に意識されていたに違いない。

にもかかわらず、結局は、比較可能な共通の視座を設定し、それに従って各論考が書かれたわけではなく、むしろ、恐らくは集められた論考の共通項を求めるという形で本書各部のテーマ構成が後付け的に行われたのであろう、という推測を招きかねないような結果に至ったことは残念である。しかしこの事実は、かえってファシズムの「比較文化論的研究」に内在する方法論的アポリアを浮き彫りにしているといえるだろう。ファシズムの政治・文化現象は各国を横断する単純な比較を拒否するほど多岐に、あるいは多様に展開しており、そのような比較のための具体的な視座に至るには、それを念頭に置きつつ、まずは研究者個人の多種多様な関心と方法論に任せて、いわばレッセ・フェールという形式で各国独自のファシズム現象を追求せざるを得ない。そのような基礎的研究の積み重ねの果てに共通の「図柄」が見えてくるのであろう。「総合的な」ファシズム研究はまだその端緒についたばかりであり、本書の目指すところもそのような「総合的視点」を手に入れるための一歩を踏み出すことにあったのだと思われる。

\*

各論考の一つ一つを詳細に検討・批判する余裕はないが、筆者の関心を惹いた論考を紹介・検討してみよう。第一部「運動と制度」の巻頭を飾る池田論文「死者たちもともに行進する——ナチズムの文化表現における『新しいもの』と『古いもの』」は死者を哀悼し想起することが、たとえメディアという衣装は新しくなろうともナチ文化の本質的動因で

あったことを手堅い手法で鮮明に呈示してみせている。池田はナチにおいては死者が生者とともに隊列を組んで行進させられたという象徴的事態をそれぞれエポック・メイキングな作品を取り上げることで描こうとする。まず、第一次大戦の戦死者と戦後の失業者をリンクさせることで両者に戦争の犠牲者として位置づけを与え、このような受難にあえぐドイツの復活・再生を訴えるリヒャルト・オイリンガーの放送劇『ドイツ受難劇：1933年』を取り上げ、次に女衞に殺されたSA隊長がゲッベルスによって国民的英雄に祭り上げられる有り様を描いた『ホルスト・ヴェッセルの歌』、さらに鉄道爆破のかどでフランス軍に銃殺された反革命テロリスト、レオ・シュラーゲターを徹底的に甦らせる役割を果たした表現主義の作家ハンス・ヨーストの戯曲『シュラーゲター』、そしてまたしてもドイツの受難と再生をテーマとしながら、危機を救う男としてヒトラー的人物の登場するクルト・ハイニッケの『ノイローデ』（この作品はティング・シュピールというナチ独特のジャンルを開拓したという視点からも論じられている）などを分析しながら、死者崇拝が過去のみならず、現在と未来に深く関わる行為であることを鮮やかに示している。すなわち「死者の想起は、過去とだけではなく、未来とわれわれをつなぐ。死者を悼むことは現在を越えることであり、現在のありかたを変える」決意を起こさせる営為にほかならないのである。さらに池田は、この心性のベクトルが国家によって統制管理されていた事実——例えばSAが中心となっていたティング・シュピールはSA上層部粛正事件「長いナイフの夜」以降は厳しく国家によって制限・管理された——をも指摘し、死者カルトが国家的儀式へと変貌していく過程にも言及している。知られる如く、特に戦死者たちに対するこのようなカルト的心性はナチにおいては祭祀化されていた。一例を挙げれば、3月16日に設定されていた「英雄記念日」がそれである。これはもともとヴァイマル共和国政府が第一次世界大戦の戦死者を追悼するために復活祭前第5日曜日に設定した「民族の悲しみの日」であったが、ナチの政権奪取後の1934年の法律で「英雄記念日」に変更され、それはさらにヒトラーによって軍隊独立の日として再定義され、また日付も3月16日にされ、キリスト教との結合を喪失する。ヴァイマル時代では半旗を掲げることになっていたこの記念日も、英雄記念日となって以後は旗が完全に掲揚された。戦死者を悼むはずの悲しみの日はこのようにして英雄の日に変質させられ、国家の現在と未来に奉仕させられるのである。池田論文は、これまで散発的にしか言及されてこなかったナチズムにおける死者崇拝心性の成立過程とその内容に関して、一定の体系的叙述を与えたものであり、その功績は高く評価されるべきであろう。

同じく第一部に収載されている高田論文「高橋健二、闘う文化部長」はある意味で衝撃的な論考であったといえるだろう。それはこの論考で高田が、日本の年輩のゲルマニストにはよく知られた存在である高橋健二という人物を容赦なく解剖し、冷徹ともいえる視線で描ききったからである。戦後、ヘッセの翻訳などで数々の賞も受けている高橋健二像は——かれの戦前の「右寄り」の活動についてささやかれることはあったにしても——一般にヒューマニスティックなイデオロギーの代弁者としてのそれであったろう。そのイメージをこの高田はもの見事にひっくり返して見せたのである。大政翼賛会文化部長と

いうポストは、初代の岸田国土が就任した1940年頃は、大政翼賛体制とその組織に懐疑の念を抱きつつも、それでも自由主義陣営の最後の砦となるかもしれないといった夢を見させてくれるものであった。自由主義陣営最後の抵抗線としてファシズムに対抗し、体制内改革を目指そうとする高度に政治的な判断がそこには働いていた。しかしその岸田も1942年には力尽きた。そしてそのいわば敗戦処理のための要員として当時40歳そこそこのドイツ文学者・高橋健二が指名されたのである。この人選が高橋の私淑していた山本有三の推挽によるものであることは勿論だが、二つの意味で「実に見事な人選であった」。一つには大政翼賛会文化部長というのは、もはや岸田が戦いに敗れ去ったあとでは、いかなる実効性もなく、単に自由主義陣営から入れておいた方がいいだろうという程度の、しかしのちのち非難されることが予想されるというポストであったからだ。つまり高橋は使い捨ての人材として送り込まれたのである。さらにもう一つには、軍部・官僚の顔色をうかがわなければならない当時の情勢を考慮に入れば、日独防共協定成立以後、「ナチス文学やナチスの文化政策の肯定的紹介者としてジャーナリズムで活躍していた」高橋は、体制側との折り合いからいって文化部長には適材であったからだ。このようないかがわしい「要職」を引き受けてしまった高橋を『「曖昧な」人の良さ』をもった人物と高田は評している。本論考には、実際、山本のいいなりになる「従僕」であり、「二流の書き手」であった「人の良い」高橋健二には、戦前のナチス文化紹介者としての自分と、戦後のヘッセ翻訳者としての自分との間の断層が見えていなかった姿がありありと描かれている。高田はさらに高橋の「曖昧さ」が日本の学歴エリートに見られる決して例外的な現象ではないことを、高橋の高一時代の周辺にいて、それぞれ要職についていく人物たちの分析を通して描いていく。おそらく高橋のもつ知的曖昧さは、戦前の日本知識人に見られる特質の一部なのかもしれない。その曖昧さが自分たちの戦争協力についてまったく「無自覚」な態度を醸成したのではないか。そしてそういった無自覚な態度は現代のわれわれにも跳ね返ってくるものにほかならない。いずれにせよ高田論文は、池田浩士らの先行論文などを別にすれば、これまでタブー視されていた領域に、すなわち独文学界の重鎮の無自覚な戦争協力の実態に、初めて本格的な批判の矛先を向け得たのである。彼女のあとに続く若い人たちがいることを祈りたい。

第二部「言説の政治」の亀山論文「独裁者との対話」では、絶対的権力者であるスターリンとその寵に一喜一憂する劇作家ブルガーコフの悲喜劇が扱われているが、浩瀚な博識に裏打ちされた「物語」の風格と面白さをもった一編である。第三部「表象するファシズム」に収録された岩崎論文「表象のポリティクスと映像の修正主義」はいわゆる「歴史家論争」の原理的諸問題を映像作品に投影させて考察したものであるが、後半の『ホロコースト』や『ハイマート』などの人気テレビドラマを素材とした分析は相当読み応えがある。ただ、「修正主義」がそこに内在しているかどうかはともかく、作品の質としては『ハイマート』の方が安手の『ホロコースト』などよりもはるかに高かったことは付言してもらいたかった。第四部「性、神話、権力」所収の徳永論文「フランクフルト学派と反ユダヤ主義研究」ではイデオロギーの欠如した政党といわれたナチスが、それにも「かかわらず、

強大な社会的・政治的力を獲得したということは、逆にイデオロギーというものの機能が変化したことを示している」との認識に立って、ナチ時代における反ユダヤ主義イデオロギーの機能変化を追跡し、その機能変化に着目していたフランクフルト学派の研究的営為を主にアドルノの『啓蒙の弁証法』を手がかりに跡づけていく。従来の古いイデオロギー論ではたとえばナチのホロコーストの動機は説明できないのだが、これをアドルノらが「権威主義的性格」モデルの適用によって克服しようとする状況を描いている。徳永は『啓蒙の弁証法』の訳者でもあり、とくに「ミメーシス」の説明など明解この上ないものがある。

その他筆者の関心を喚起したものには小岸論文「ドイツ・ファシズムの演説」(第三部)、深澤論文「ゲルマン主義運動の生成と挫折」(第四部)などがあるが、ここで言及できなかった論考の中にもユニークなもの多数あり、まさに枚挙にいとまがない。

\*

最後に付言するならば、これら極めて多岐にわたる現象をファシズムという概念で包括的に扱うことが可能かどうかは、また別に問われる問題であろう。特に天皇制下の日本軍国主義については、これをファシズムとは別種のタイプの政治・文化形態であると主張する論者も多数いることから、今後論議を呼ぶことになるかもしれない。同様のことは「ユダヤ人問題」を本質的構成要素として抱え込んでいるナチズムにも当てはまることだろう。ちなみに、このファシズムの普遍性の問題に関しては小岸が序論で言及している。デ・フリーチェの『ファシズム論』によるとファシズムはヨーロッパに特殊な現象ということになるのだが(フリーチェは丸山真男のファシズム論を英訳で読んでおり、例えば日本などの事情に無知であるがゆえに、こういつているわけではない)、小岸はファシズムを「普遍」的運動と捉えることでこの概念をアジア一般、ラテンアメリカ諸国にまで拡大しようとしている。小岸は、「普遍」としてのファシズムという観点に依拠しつつ、時間・空間を超えてファシズムは発現しようと説く。小岸によれば、いわば現代の日常的なシーンのなかにこそファシズム化の危険性があるという。小岸はファシズムを歴史的に特殊な現象ではなく、時空をまたいで遍在し、所与条件次第で発現する病理的現象としてとらえようとする。

こういった普遍化の姿勢をフリーチェはその著『ファシズム論』で「地域や歴史を離れて歴史的にファシズムを論じることは、恣意的な独断にすぎない」と批判しているが、この批判に小岸は十分に応えているだろうか。あらゆるテロルの独裁政治をファシズムと呼んだ場合、各国に「特殊な歴史的現実の意義を過小評価することになり、(中略)ファシズムにとって典型的な地理的範囲や歴史的時期まで、暗に拡大することになる」(フリーチェ)のではないか。また本書には各国の特質に濃厚な形で依拠した論考が並んでいるようだが、これら特殊の問題群から小岸のいう「普遍」の問題への道程はいかなる形で理論化されるのであろうか。これは恐らく、本書を生みだし得た研究集団の今後の理論的課題として残るであろう。

この共同研究の今後の展望としては、たとえば造形芸術、建築といった他の芸術ジャンルをも巻き込みつつ、編者も序論で言及しているように、とりわけ非ヨーロッパ諸国におけるファシズム受容のありようを取り扱っていくことになるのだろうか。いずれにせよ、発売後まもなく品切れとなり、この種の「カタイ」本にしては稀有のことだが、直ちに第二版が出たことから見ても、この論集が並外れたアウラを放散していることだけは間違いない。優れた研究書の出現を素直に喜ぶたい。